

いつも一緒 富山のペットたち

今回は、犬や猫の体のできもの「腫瘍」について説明します。ペットも人間と同じで、良性のものから、転移して死に至ることもある悪性のもまで種類はさまざまです。



長田 雅美

高島獣医科魚津病院長
(魚津市本江)

腫瘍に注意

ある検査センターが数年前に発表した集計によると、検査のために送られてきた犬や猫などのペットの腫瘍の内訳は、皮膚が約半数、乳腺が約3割、残りが消化管やリンパ節、肝臓など内臓の腫瘍でした。年齢別で見ると、これも人間と同様に、年を取るとともに腫瘍ができるケースが増え、9〜11歳くらいの年齢が最も多いようです。ただ、例外もあって、皮膚にできる組織球腫という腫瘍は、生後1年ほどが一番多いという報告もあります。

私たちが診察の現場でよく出会う腫瘍について解説します。

皮膚には、いろいろな種類の腫瘍ができます。良性のものには、皮膚の下に脂肪の塊ができて触るとゴムのようになめらかな脂肪腫、またの縁にふくらんで大きくなると目の表面をこすって傷つけることもあるマイボーム腺腫などがあります。悪性のものには、毛が白い猫の耳の外側や鼻にできやすい扁平上皮がん、耳の中にできる耳垢腺がんなどが挙げられます。



鼻腔内腫瘍で顔の形が変わったダックスフント

なっても精巣が陰嚢に下りず、内股やおなかの中に残っている場合は、若くても起きる可能性があります。若いうちに去勢手術をしておくと、精巣腫瘍にはなりません。

乳腺腫瘍は、犬の場合は良性と悪性が半々ほどですが、猫は悪性がほとんどだと言われています。悪性のものは、しっかりと切除されていると病理検査で診断されても、数年後に再発することがあります。早期に避妊手術を行えば、腫瘍の発生を抑えられるという報告もあります。

リンパ腫は、犬の場合は原因がはっきりしていませんが、猫は猫白血病ウイルスの感染が指摘されています。全身のリンパ節がはれるタイプが最も多く、消化器や皮膚、胸腔内の縦隔という部位にも

納得いく治療法選ぼう

去勢・避妊で抑制
次は雄の高齢犬にできやすい精巣腫瘍についてです。成犬に

肛門周囲腺腫は去勢してない高齢の雄犬にできやすい腫瘍です。肛門の周りや腰から下の部分に腫瘍がきたりします。この腫瘍も、若いうちに去勢手術をしておけば発生する可能性は低くなります。腫瘍を切除する手術の際、去勢手術も同時に

できやすい腫瘍です。リンパ腫は切除できないため、抗がん剤をいくつか組み合わせる化学療法で治療します。腫瘍の進行の程度や体の具合を見ながら、組み合わせる薬剤を変えていきます。完治させることは難しく、症状が一時的にならなくても、いずれは再発する

クすることが重要です。腫瘍がきたらどう対処し、治療していくかが大きな問題です。腫瘍の種類や進行の程度、腫瘍ができたペットの年齢や体の状態によって治療方法は変わってきます。かかりつけの先生としっかり相談して、納得のいく治療方法を選択しまし

難しい腫瘍です。体を触りチェック
鼻腔内腫瘍は悪性の腺がんや扁平上皮がん、肉腫などが多く、顔(鼻筋)の形が変わったり、鼻血が出たりして異常に気付くケースが少なくありません。肝臓、脾臓、腎臓などのおなかの中の臓器にも腫瘍ができ、これらは腹腔内腫瘍と呼ばれます。はれているだけの良性のものから悪性のもまで、さまざまです。

残念ながら、腫瘍は予防できるわけではありません。早めの去勢、避妊手術で発生の確率を下げられる場合もありますが、そうでないものもあります。日頃から体を触ってあげて、できものがないか、しっかりとチェック

う。
「いつも一緒 富山のペットたち」は、毎月第1木曜日に掲載します。

2011(平成23年) 9月1日
北日本新聞